

2018年8月4日 川越教会

## 命をどう用いるか

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書 23章 34節

そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」

[序] 8月を迎えて

本日は8月に入りましたので、例年のおおりに、礼拝の中でも「平和宣言」をご一緒に唱和することをしてしています。私たちにあって「平和」はいつの時も考え祈るべきことですが、特に8月は日本の国にとって、そのことに思いを深くする時ですので、礼拝も、そのような祈りに導かれたいと思っております。いつもの「聖書教育」誌の「ヨセフ物語」は、また8月の第三週から再開したいと思っています。

[1] 戦争はどこから生まれるか

第二次世界大戦が終わってから今年で74年になります。つまり73才以下の方は、この日本で戦争を体験しておりません。「もう二度と私たちの国は一切の軍事力も持ちません」との日本国憲法を持ち、一見平和な時を過ごしています。今私は「一見平和な時」と申しました。つまり「表面上」なのです。表面上でも平和であれば良い、とも言えるのかもしれませんが、それはまやかしの平和に過ぎないでしょう。聖書はその点、楽観的には考えていないと思います。何故なら、人間の心が真の平和、真のやわらぎに支配されていなければ、いつでも人間の心は戦争の火種を抱えているので、ちょっとしたきっかけで、その悪しき歯車が、もはや止められない重さで動き出してしまうことになりかねません。

戦争を生み出す心は「憎悪の心」だと思います。それは残念ながら私たち人間は皆持っているものです。けれども、普段は隠されています。押さえて生きている所があると言っていいでしょう。しかし、その「憎悪の心」、「敵愾(がい)心」、「許さない心」というものを、権力を持つ者がうまく利用しようとすると、そこから戦争は始まるのではないのでしょうか？クリスチャンだから安全、などということはありません。むしろクリスチャンは、神様の愛を知らされている者としてその最前線で神様から問われているのだと思います。——「あなたは、どう生きるのか？」と。

## [2] 「報復」の論理がまかり通ろうとしている時代

今は、危なっかしい時代と言えるのではないかと申しました。ちょうど週報の「コラム」欄で、光さんが、今の教育の場で日韓関係を正しく教えることが難しくなっていると書いておられますが本当にそうなのだろうなあと思います。

昨日（8/3）の「東京新聞」にはこのような社説が載っておりました。

「日韓関係が危機的だ。韓国を、輸出管理上の優遇を適用する「ホワイト国」から除外した決定は、半導体材料の輸出管理強化に続く第二弾となる。日本政府はいずれも元徴用工問題とは無関係で、安全保障上の見直しだと説明しているが、タイミングからしてこの問題への対抗措置なのは明白だ。日韓間では影響が広がっている。心配なのは地方自治体や若者による草の根の交流事業が相次いで中止されていることだ。

韓国では日本製品の不買運動が拡大。日本への観光客も激減している。混乱の拡大を懸念し、韓国だけではなく米国も見送るよう求めていたのにもかかわらず、除外を強行した責任は重い。」そして、「“報復”の悪循環はどちらの利益にもならない。感情を抑え、対話を始めるべきだ。」と書いてありました。

皆さんはどう考えるでしょうか？ 私は基本的にこの意見に賛同致します。それは「報復の論理」というものは、歯止めが効かなくなるのではないかと思いますからです。「報復合戦」が、幸せな結果をもたらすことはないのではないのでしょうか。現代はそのような空気が蔓延しているのかもしれないと思います。アメリカと中国も、関税の引き上げがエスカレートして、收拾がつかなくなっています。

また、先月起きた「京都アニメーション」放火殺人事件とも、私は共通するものを感じてしまいます。その容疑者の真相はまだ分かりませんが、どこか短絡的で勝手な「やられたらやり返す」といった思いがあのような悲惨な犯行に繋がっているようにも思えます。隠されていた人間の暗い面（ダークサイド）が、いつしか剥き出しに表れて来、しかも社会全体がそのような空気を醸しだしているとすれば、これは私たちも無関係とは言えないと思うのです。

## [3] キリストの「祈り」が聞こえてくる

今週は、皆さんご存知のように、今から74年前、日本に（いや世界で初めて）原子力爆弾が投下された記念日を迎えますね。8/6は広島に、8/9は長崎に原爆が落とされ、何十万単位の人々が何千度という熱で体が焼かれ、ウランやプルトニウム、その核分裂の威力によって細胞が砕かれ、死に至り、或いはその時死ななくても、被爆した体を抱えながら生きなければならないことになりました。政治的には色々なことが言えるのでしょう。どちらが戦いを仕掛けたとか、

この犠牲は戦争終結のために已むを得なかったことだとか…。けれども、明らかにこれは、**国家の「報復の論理」の帰結**です。国家が、この現実を引き起こしたのです。

ここで私たちは聖書の言葉に耳を傾けましょう。今のこの世界に、また、私たち一人ひとりに届けられている「祈り」の言葉です。

ルカによる福音書 23 章 34 節です。

『**そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」**』

——「**そのとき**」。これは 2000 年前のエルサレム郊外だけに留まりません。**あの原爆投下の日も、そして今日も、**主は同じように私たちのために祈っておられるのだと思います。「**神の独り子**」が私たちのために、「自分が何をしているのか知らない」その愚かさの故に滅ぼされないように、まことの父なる神様に、「わたしに免じて赦して欲しい」という祈りを貫いて下さったのです。そして、何ということでしょうか、ここには深い人間の罪にも拘わらず、それを覆う「赦し」と「愛」があります。**神の独り子が、人間の全ての罪を負って滅ぼされ、人間には、“この神様の愛を受けてあなたは生きて行って欲しいのだ、この神様の愛を伝える為にあなたの命を使って欲しいのだ”**と言って下さっているのです！ルカは、よくぞこの主の祈りの言葉を私たちに残し、記して下さいたことか、と思うのです。

私は、この**主イエス・キリストの祈り**の言葉に、今から 423 年前にもなります、あの長崎で殉教した、日本で初めての殉教者と言われる「**26 聖人**」の最期の祈りの言葉を思い起こさないではられません。

1596 (慶長元) 年、この国の最高権力者は**太閤・豊臣秀吉**でありました。彼は、1587 年に、**伴天連追放令** (キリシタン禁教札) を発布したのですが、当初は緩やかなものでした。外国船の来航は奨励するが、キリスト教は禁止するというものであり、実際には船で入ってくるイエズス会の宣教師たちを受け入れ、宣教も黙認していたようです。秀吉自身も、心のどこかには、側近のキリシタン大名・高山右近らの影響もあり、キリスト教に憧れを抱いていたとも言われています。けれども、1596 年、スペイン船サン・フェリペ号が台風で土佐に漂着した際、五奉行が「スペインはキリシタンを日本で増やし、その後に日本を征服しようとしている」と語った言葉に、**秀吉は恐れを抱き、その船に乗っていたフランシスコ会の宣教師たちを捕縛したのです。**その**疑心暗鬼**はエスカレートしました。秀吉は京都奉行の石田光成に命じて、関西で布教活動を行っていた**フランシスコ会の宣教師たち 6 名とイエズス会の聖パウロ三木とその仲間、また 3 名の子供を**含

む日本人のキリシタン 18 名、計 24 名を捕えました。彼らは見せしめとして、処刑を命ぜられたのです。まず京都で左耳たぶをそがれ、牛車で町中をひき回されました。伏見や大坂でも同じように扱われ、1597 年 1 月 10 日大坂から長崎まで殉教の旅が始まりました。冬の厳しい寒さの中、約 1000 キロの道を歩かされました。後ろ手に縛られながら。しかし彼らは、祈り、神を賛美しながら歩いていたと言われていました。

何故長崎の地が選ばれたのか。それは長崎の地には沢山のキリシタンたちがいましたから、彼らを黙らせる、無力化させるという意図があったでしょう。(それは後に逆効果になりましたが)。しかし、この迫害を受けた者たちの心は自由でした。聖パウロ三木は道中、キリストの教えを伝え続けたと言いますし、その道中、彼らの仲間に加わった者たちが 2 人出てきて、合計 26 人になって長崎・西坂の丘へと歩みを進めたのです。処刑の為の行列であるのに、讃美を歌いながら、まるで凱旋のパレードのようです。最年少のルドビコ茨木という 12 歳の少年がいました。それを見た奉行・寺沢半三郎は不憫に思い、「キリシタンを捨てれば命を助けて武士に取り立ててやろう」と優しく語りかけたと言います。しかしルドビコはそれに対して、こう答えました。「お奉行様、あなたこそキリシタンにかなりなさいませ。そして一緒にパライソ(天国)に参りましょう」。

1597 年 2 月 5 日、午前 10 時、西坂の丘に 26 本の十字架が街と港に向かって、一列に並べられました。列の両側から槍を持った役人が刺し始めました。殉教者たちの賛美の歌声、また「イエス、パライソ、マリア…」と祈るその祈りの声も次第に小さくなって、正午にはすべてが終わったと言います。その中の一人の修道士、聖パウロ三木は、十字架の上から次のような最後の言葉を語られました。これは、イエズス会司祭ルイス・フロイスが「日本二十六聖人殉教記」で記しています。パウロ三木はその時 33 才でした。

「ここにおいでになる全ての人々よ、私の言うことをお聞き下さい。私はイエズス会の修道士であります。私は何の罪も犯してはいませんが、ただ我が主イエス・キリストの教えを説いたから死ぬのです。私はこの理由で死ぬことを喜び、これは神が私に授け給う大いなる御恵みだと思ふ。今この時を前にして、あなたたちを欺こうとは思いません。人間の救いのためには、キリシタンの道以外に他はないことを断言し、証言します。キリシタンの教えが、敵、および自分に危害を加えた人々を赦すように教えているゆえ、私は太閤様を始め、私の処刑に関係した人々を赦します。私はこの人々に少しも恨みを抱いてはおりません。ただ切に希うのは太閤様をはじめ、日本人全部が一日も早くキリシタンになられることです。」

**[結] 「憎むことをするな、あなたは愛を持っている」**

26 聖人記念館には、このパウロ三木が十字架に架けられている等身大の木彫りの像が壁にかかげられ、見る者に迫ってきます。そして私は、それと共に、それ以上に、その記念館にやはり置かれているリアルなキリストの十字架像に胸を締め付けられました。そんなに大きくありません。私の目の位置に、いや更に下に、キリストが頭を垂れ、茨の冠から血を流し、目を閉じている姿が、「ああ、キリストは、こんなにも私のために小さくなり、酷い痛みを負われ、死んで下さったのだ。ああ、これは私の罪の故だ。このことは本当に起こったことだったのだ」と心に刺さりました。そして、あの祈りの言葉が響いてきたのです。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」

イエス様は、その生涯、敵を打ち負かすという戦いをしたのではなく、私たちの中に巣食う「罪」を滅ぼす道はこれしかないという戦いをして下さったのだと思います。それが「赦し」です。神様の赦しです！人間の、私たちの罪は恐らく「原爆」よりも大きいのです。間違いないでしょう。神様を死に追いやってしまったのですから。それに気が付かない私たちです。しかし、その私たちの為に、「そのとき」主は祈って下さいました。そして今も祈って下さっているのです。私たちが「報復の連鎖」に生きることがないように、神の独り子が身を持って食い止めて下さっているのではないのでしょうか。

キリスト者たちは、このキリストに従い、祈るために召されていると思います。「祈り」というのは、「愛」です。本当にそうです。人は、他者のために祈っている時、罪を犯すことは出来ません。そして、祈る中で、自分自身が変わられてゆくのです。

あの喜劇王チャールズ・チャップリンは、あのヒットラーを揶揄した映画『独裁者』の中で、このように言っています。

「憎むことをするな、あなたは愛を持っている。愛されない者だけが憎むのだ」と。

…神様に深く愛されていることを知るものは、他者に対しても、優しくなれるのではないのでしょうか。

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネによる福音書 13:34 節）

このために、私たちの命を用いたいと思います。

お祈りを致します。